

モダニズムをこえて  
～ 多元的視点に基づく共生としての音楽  
(1960年代～現代)

サウンドデザイン演習  
女子美術大学 石井拓洋  
ishii05042@venus.joshibi.jp

「さしあたりは、われわれ人間が自然の一部でもあることを  
認識することであり、ひいては、人間以上に偉大なものが存在  
することをわきまえることです。それが美学と結びつくのは、  
美がそのようなものだからです」

# 本日の話の流れ

1. 現代への転機（1960年代の構造主義）

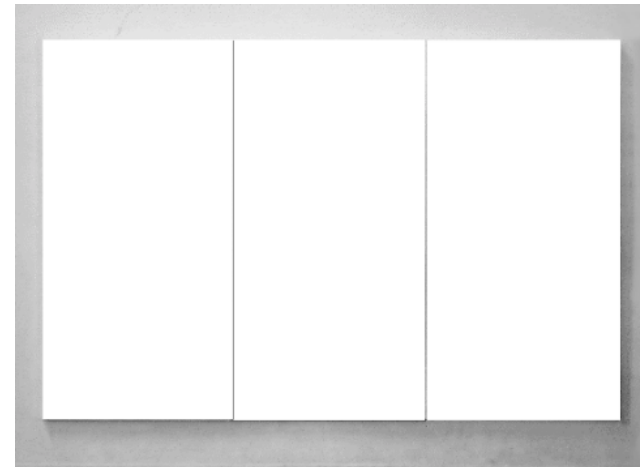
2. 「構造主義」のあとの世界観

※ 多元的視点に基づく共生としての音楽

# 1. 現代への転機

# モダンアート（近代芸術）の帰結

1  
現代への転機



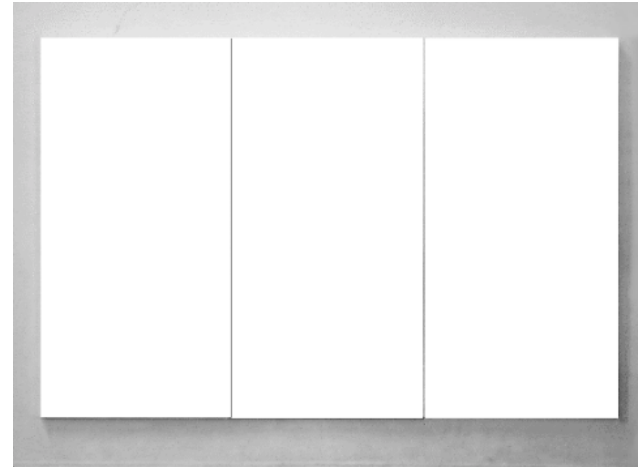
1950年代。反人間主義というあらたな見地を取り込みながら、一方で、なおも啓蒙主義に導かれた「要素還元主義」や「進歩主義」によって〈芸術の本質〉を突き詰めた結果、

皮肉にも、音楽には音が無くなり、絵画には色と形が無くなった。

→ 近代的な「進歩」の不能（「ニヒリズム」の到来、「啓蒙の弁証法」）。

# モダンアート（近代芸術）の帰結

1  
現代への転機



ニヒリズムとは「最高の価値が無価値になるということである」

～フリードリヒ・ニーチェ 『道徳の系譜』（1887）

※「最高の価値」= 近代主義

# さらに世の中の本質をさぐる動き

- ・ 近代は人間の曖昧な知覚に対して、さらに「近代」的な発想で乗り越えようとした

↓

- ・ **数学的発想**によって、より厳密な真理「正しさ」を探求した（**還元主義的発想**）

↓

- ・ とくに「集合」に注目

↓

- ・ 表面上の現われにとらわれず、**数学的発想をもとに、物事を還元・純化すること**で見いだされた要素を、いくつかの「集合」として認識する。

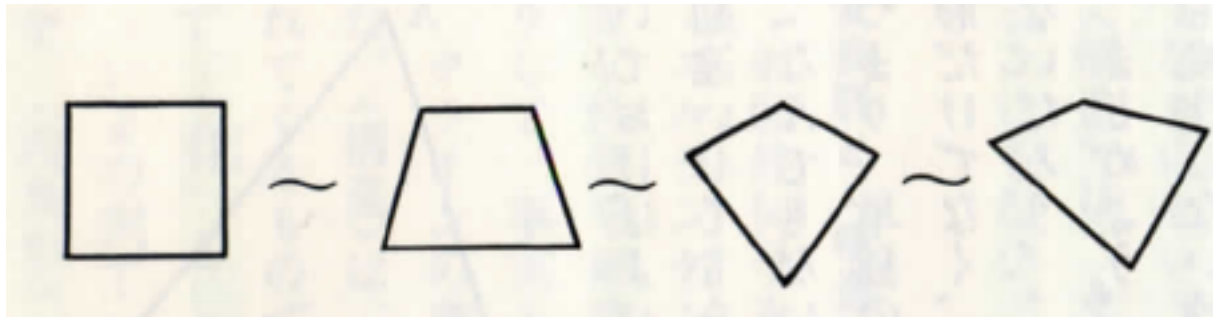
↓

- ・ **世界の多様な現れも、幾つかの「集合」同士の関係性として整理できるのでは？**

# さらに世の中の本質をさぐる動き

例えば、数学的発想で、物事を還元して共通の性質をみいだすとは？

Q. 下の多様な形には、どのような〈同じ〉がある？

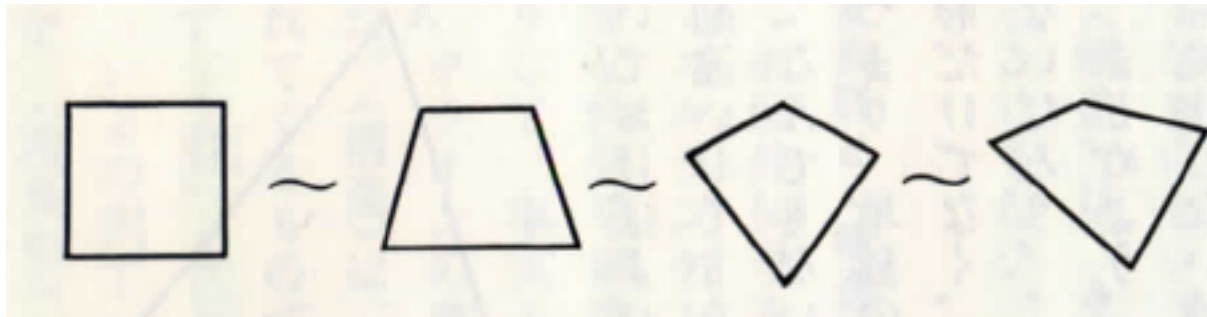




# さらに世の中の本質をさぐる動き

例えば、数学的発想で、物事を還元して共通の性質をみいだすとは？

Q. 下の多様な形には、どのような〈同じ〉がある？



A. **すべて正方形として同じ。**

それぞれの見え方の違いは、同じ正方形を、様々な視点からとらえた時の変化にすぎず、本質には関わらないとして無視する発想 (= 射影幾何学的発想)。

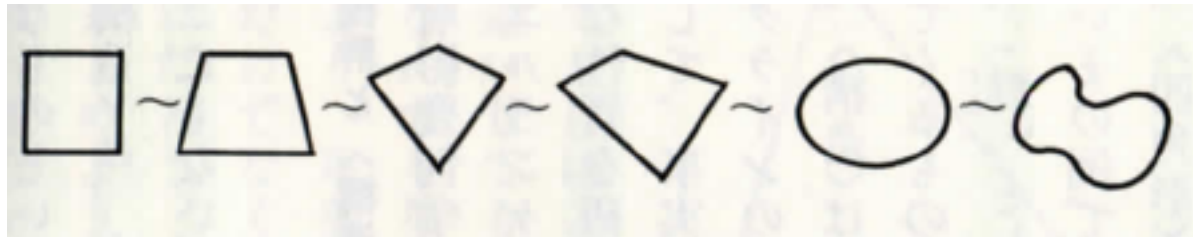
[橋爪：167-169]

→ 「射影的性質」上、すべて同じ正方形 = すべて同じ集合に属する

# さらに世の中の本質をさぐる動き

さらに、応用的な数学的発想では、、、

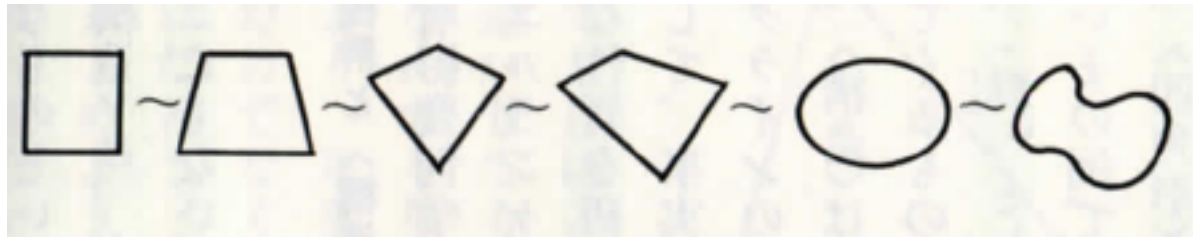
Q. 下の多様な形には、どのような〈同じ〉がある？



# さらに世の中の本質をさぐる動き

さらに、応用的な数学的発想では、、、

Q. 下の多様な形には、どのような〈同じ〉がある？

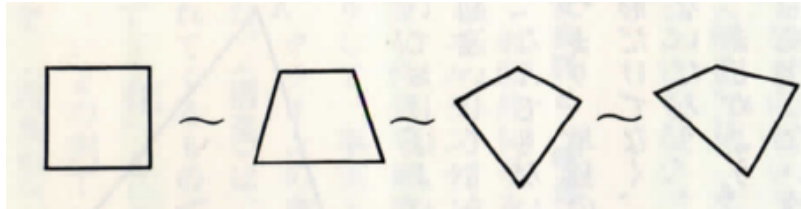


A. **すべて 閉じた形 (= 閉曲線) として同じ形**

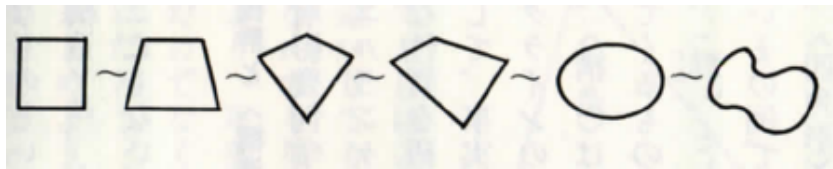
「いくらでも伸びたりちじんだりするゴム膜の上に、図形を書いてみて、伸び縮みさせながら別の図形に重ねることができるかを、考えてみる」  
発想 (= 位相幾何学的発想)。 [橋爪: 169-171]

→ 「位相的性質」上、すべて同じ正方形 = すべて同じ集合に属する。

# さらに世の中の本質をさぐる動き



射影的性質上、すべて同じ形



位相的性質上、すべて同じ形

視点が移動にともなって見え方が変化しても、  
また、ゴム膜の伸縮にともなって見え方が変化しても、

「そのときでも変化しない性質を、その図形の一群に共通する『骨組み』のようなものといういみで、〈構造〉とよぶ」 [橋爪：169-171]

※ここでの「構造」とは数学用語(フェリックス・クラインによる用語)

# 「構造主義」の登場

1  
現代への転機

クロード・レヴィ=ストロース Claude Lévi-Strauss (1908 – 2009, 仏) 文化人類学者



# 「構造主義」の登場

クロード・レヴィ=ストロース Claude Lévi-Strauss (1908 – 2009, 仏) 文化人類学者

- ・ 人間社会には、見え方が変化しても変わらない「構造」が存在しており、人間や人間社会の動向は、「構造」によって動かされていることを提唱。

→ 「構造主義」

- ・ たとえば、〈家族内で結婚しない〉などの「構造」。
- ・ 数学の「構造」と、ソシュールの「言語学」から発想
- ・ 「構造」は、いわば変数のようなものとして存在し、変数に入る数値によって状況が変化するが、しかし、変化を生み出す方法は、歴史に関わらず変わらない。



$$y = 2x$$

# 「構造主義」の逆説

- ・ 還元主義的に世界の「本質」を正しく認識するという、「近代的」な試みだった

↓

- ・ しかし、皮肉にも、、

↓

- ・ 「構造」を探求する過程で、逆に「近代」的世界観を批判せねばならない  
事実を見いだしてしまうことになる。

# 「構造主義」の逆説

【レヴィ=ストロースが明らかにした事実】

オーストラリアの原住民の〈家族内での結婚をさける〉ための古来からの仕組みと、ヨーロッパが2千年かけて見いだした現代数学の 構造 が同じであった。

(「ナンビクワラ族の交叉イトコ婚」と 数学「クラインの四元群」とが同じ構造)

→ 豪州の原住民のほうが、現代数学を先に実用 ? = 西洋中心主義への疑問  
= 進歩主義への疑問

→ 「構造」は歴史をこえた普遍なるものである。 = 進歩主義 (歴史性) の否定

(1960年代のさらなる背景)

※ 2度の悲惨な戦争、共産圏への政治的不信 = 人間中心主義、進歩主義への疑問



## 2. 「構造主義」のあとの世界観

# 「構造主義」のあとの世界観 (その一端)

2  
「構造主義」の  
あとの世界観

- ・ 「正しさ」とは「前提」を設定することで、はじめて生まれる。

ex.) 【前提】「太陽が停止している」→ 【正解?】「地球は円運動している」  
しかし、本当は太陽は動き、さらに銀河系も膨張。では地球の動きは？

↓

- ・ 世の中の真相は、様々な「構造」同士の極めて複雑な関係で成り立っている  
(「関係論」的に〈様々な位置の視点〉が必要。一点透視図法 = 近代的)

↓

- ・ そもそも、「正しさ」のための「前提」を作りだしているのは誰か？

↓

- ・ 権力 ( 権力が「正しさ」をつくっている )。  
ただし、それは「王様」的特定の人物ではなく、.....

# 「構造主義」のあとの世界観 (その一端)

2  
「構造主義」の  
あとの世界観

- ・ 「正しさ」の「前提」をつくっている**権力 (政治力)**とは？
  - 「人間社会」それ自体。**人間集団の意識**。時代のイデオロギー。
  - 中でも大きな要因は「**市場経済**」。そして 消費者の趣向。
  - つまり「**高度消費社会**」（消費が生産動向を決定する社会）。
- ・ わたしたちは、〈市場経済に基づく人間集団の意識〉の動きのなかにとりこまれている。
- ・ 使用する言葉 (日本語など) の制限によって、発想も制限されている。

# 「構造主義」のあとの世界観 (その一端)

2  
「構造主義」の  
あとの世界観

- ・ つまり、本質的正しさ ( 形而上学的真理 ) はない。
- ・ 現実社会にある「正しさ」には 権力 ( 政治性 ) がふくまれている。

↓

各自の ( 本音の ) 「正しさ」の共感の困難。

↓

「アート」の定義の共感の困難 ( A.ダントー「アート・ワールド」 ) 。

※ 多元的視点に基づく共生としての音楽

# ※ 映像の中の音楽の可能性

※  
多元的視点に基づく  
共生としての音楽

- ・ 近代的「芸術」音楽を批判的に乗り越えるために
  - 音楽が生まれる誘因 をとりもどすこと  
(還元・純化・自律化 から、自然な文脈の中に音楽を再定位)
  - 視覚、物語、動作、(等) あらゆる表現要素への視点  
それらとの関係としての音楽 → 関係性の中でこそ価値創出
  - とくに 多様な文脈を作りうる「映像」に着目
  - 映像をとおして自然との共生と、自然への〈祈り〉のための音楽  
「崇高」への畏怖と、祈りの中の美の追求

## ※「近代」への〈ツッコミ〉は今後を生きる力をつくる

※  
多元的視点に基づく  
共生としての音楽

- 近代「芸術」の中の政治性に(すくなくとも)自覚的でありたい
- 日常的な「正しさ」のなかの政治性に(すくなくとも)自覚的でありたい
- 西洋や人間のみの一元的な視点の置きかたには批判的でありたい
- 「近代」批判は、わたしたちの未来にとって大きな意義をもつ
- システムから逸脱する方策の一つが「狂気」であり、アートではないか
- 近代のあり方を再検討して、批判的に乗り越えることによって各自のアートの進むべき方向性が、明確に見いだすことができるはず
- 「近代」批判は 自分や皆にとっての、今後を生きる力をつくる

# 参考文献

- 渡辺裕『西洋音楽演奏史序説』春秋社
- 佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- 小田部胤久(2008)『西洋美学史』東京大学出版会
- 西村清和 (1995)『現代アートの哲学』産業図書
- F.ニーチェ (1887=1940)『道德の系譜』木場深定訳、岩波文庫
- 菅原教夫 (1994)『現代アートとは何か』丸善ライブラリー
- 竹田青嗣 (1992)『現代思想の冒険』ちくま学芸文庫
- 橋爪大三郎 (1988)『はじめての構造主義』講談社現代新書